

## 日英比較表現論 (3)

南 満 幸

### はじめに

今回はまず、日英両言語に見られる、「肩を持つ」「足を引っ張る」などのいわゆる「身体表現」を比較することによって、両言語の発想の類似点及び相違点を調べようと思う。具体的には、

(1) 日本語の身体表現（例えば、「頭」を含んだ表現）を英訳した時、それに対応する英単語（この場合 head）を用いるのが最も自然な場合は○、それも可能だがそれと同等以上に自然な他の表現がある場合は△、対応する英単語を用いた英訳が無理な場合は×、というふうに、やや大雑把ながら3種類に分類してみた。

(2) 次いで、英語→日本語という逆方向から同様の分析を行なう。

という手順を踏んで行く。

### (1) 頭

- |        |   |
|--------|---|
| ○ 頭が良い | have a good <b>head</b> (or brain),<br>be bright (or smart, sharp), etc.          |
| ○ 頭が悪い | have a dull (or bad) <b>head</b> ,<br>have no brains,<br>be dense (or dumb), etc. |

日本語の「頭」には、「頭脳、知力」という意味もあるので、“have a good brain”も“have a good head”も同じだろう、という考え方も可能かも知れないが、「頭が良い」は普通の日本語だが、「?脳が良い」は少なくとも自然な日本語とは言い難いので、この2つを全く同じに扱うことは出来ない、というのが本稿の立場である。

- |                 |  |
|-----------------|--|
| △ (考えなどが) 頭に浮かぶ | occur to one's mind,<br>flash into one's mind, |
|-----------------|--|

come into one's **head**, etc.

Head を用いた表現も可能ではあるが、どうやら英語の感覚では「idea が出現する場所」としては、head よりも mindの方が自然なようである。

× (～には) 頭が下がる

take one's hat off (to～)

この「×」は恐らく、日本人と英米人の文化的差異に由来するのであろう。日本では、敬意の表現として「礼、お辞儀」をする習慣が日常生活に定着しているのに対して、英語圏ではそういう動作は一般的ではない、ということであろう。英語の方は、日本語で言うと「脱帽する」、(やや古典的な言い回しだと)「兜を脱ぐ」に対応する書き方である。

△ (～には) 頭が上がらない

cannot look (a person) straight  
in the eye,

cannot hold (or lift) up one's **head**  
(before a person)

増田(1974)に2番目の英訳が載っているので、一応「△」としたが、上の「頭が下がる」と同様、この「直訳」は英語圏の人々には分かりにくいのではないか。筆者の認識では、この表現は「恥ずかしくて」顔を上げられない、というニュアンスで使われる筈である。(ついながら、hold up one's headには「(不幸な目に遭っても、うつむかないで)前向きに(胸を張って)生きる」という意味もある。)

上位者の面前では頭を低くしていなければならない、という古来からの習慣がある日本では、ごく自然な表現ではあるが。英米人にはやはり、「恩義があるので(目上の人なので)気後れして、真っ直ぐに相手の目を見ることができない」という1番目の英訳の方がはるかに理解しやすいであろう。

× 頭が低い

be modest

この「×」も上の例と同様の理由によるものと思われる。

× 頭に来る

(人が主語) flare up, get mad,  
blow one's top, etc.

(原因が主語) drive (a person)  
crazy, get (a person's) goat,  
burn (a person) up, etc.

確かに英語には come to a head という表現があることはあるが、これは「危機に陥る」などの全く違う意味なので注意が必要である。

○ 頭が固い

be **hardheaded**

固い殻に閉じこもって、新しい（または進歩的な）考え、他人の意見などを寄せ付けない、  
という発想は両言語共通のようである。

- |          |  |
|----------|--|
| × 頭を冷やす  | cool off ( <i>or</i> down),<br>calm down |
| × 頭に血が昇る | come into hot blood                      |

日本語の感覚では、「体内の血が頭に集中してカッカと熱くなる」という捉え方をするようだが、英語では「血が熱くなる」というふうに考えるようである。確かに、「彼女は頭に血が昇っている」を“Her blood is up.”と英訳することもできるが、この up は、「体の上（頭）の方にある」というよりはむしろ、「温度が上昇している（熱くなっている）」という意味を表わしているように思われる。

次に、逆方向からの比較をしてみよう。つまり、head という単語を含んだ英語の表現を和訳した場合に、「頭」という単語が出現するかどうかを調べるということである。先程と同様に、「○、△、×」の3段階で判定してみる。

- × above (a person's) head                      (人には) 理解できない

もちろん、この head は、「知力、理解力」という意味で、「誰その理解力より上の（理解力を越えた）レベルにある」から、「理解できない」となる。「?頭を越えている」という言い方は「自然な日本語」とは言い難いので、判定は「×」とした。

- × bang one's head against  
a brick wall

「レンガの壁に頭を打ちつける」という「直訳」が意味不明である以上、判定は「×」とせざるを得ない。

- beat (something) into (a person's) head (事)を(人の)頭に叩き込む

この例では、日英両言語がびったり重なるようである。

- × bite (a person's) head off                    (人) を叱りつける

「首（この場合「頭」ではない）を噛みちぎる」と直訳してしまうと、文字通りの意味にしか解釈されないであろう。つまり、人間が熊や虎といった猛獣に襲われて食い殺される場面しか思い浮かばないであろう。

- bother one's head 頭を悩ませる

× bury one's head in the sand (困難などに) 目をつぶる、直面するのを避ける  
英語の方は、敵に遭遇したときのダチョウの行動の観察に基づいて生まれた表現であろうが、「頭を砂に埋める」という直訳は意味不明である。「頭隠して尻隠さず」という日本語表現もあることはあるが、この場合意味がずれる。

× gather head (嵐、川の流れなどが) 勢いを増す  
この英語表現には「募兵する」というもう一つの意味があるが、こちらは「(兵隊の) 頭数を集める」から来たものであろう。(こういう場合、及び家畜の頭数を数える場合の head は単複同形。) そこから、「兵隊が増える」→「軍隊の勢力が増す」という流れで出来た意味だと推測される。

× gather to head (陰謀などの機が) 熟する  
上記の例に似た表現だが、こちらは由来不明。「? 頭に集まる」という直訳が意味不明だから「×」と判定した、という程度のことしか言えない。

○ get ~ into (or through) ~をすっかり頭に入れる  
one's head

× give (a person) his head (人) を好きに行動させる  
「自分の頭 (ここではもちろん「思考力、判断力」の意) で考えて行動する自由を与える」ということであろうが、和訳に「頭」という単語を使うのはやはり無理がある。

× go to (a person's) head (酒などが) (人) を酔わせる、興奮させる、  
(事が) (人) を慢心させる  
酒などの作用が頭に届いて正常な判断力・思考力を麻痺させる (狂わせる)、という発想から出来た表現であろうが、「? 頭に行く」は意味不明である。

× have a strong head 酒に強い  
「? 頭が強い」という直訳が意味不明なのは確かだが、この表現の由来は定かではない。あえて推測するなら、上の例の「酒の作用」に容易には侵されない頑強な頭 (判断力、思考力) を持っている、ということか。

× have one's head in the clouds きわめて非現実的である、  
現実には即した行動を取らない  
ギリシア神話におけるギガス、あるいは日本民話におけるダイダラボッチのような、いわゆる「雲を突く巨人」はあくまで伝説上の存在であって、現実には存在しない、という所から出

来た表現だと思われるが、「頭を雲に突っ込んでいる」という直訳は意味不明である。

## (2) 首

△ 借金で首が回らない

be over head and ears in debt,  
be deeply in debt,  
be up to one's **neck** (or the eyes,  
ears) in debt

一応、「△」と判定はしたものの、3番目の英訳に neck が登場するので、「×」にするわけにはいかない、という程度の気持ちで付けた印である。しかし、これは、日本語の「首」と英語の neck の違いというよりもむしろ、両言語における借金の捉え方の違いから来るものであろう。つまり、日本語の「借金」は「枷のように身体を拘束する物」と見なす（その拘束が「首を回す」という簡単な動作さえも出来なくさせるほど強いということ）のに対して、英語の debt は「海（湖、池など）の水のように人間をどっぷり浸らせる（悪化が進むと、溺れさせる）物」として捉えられている、という違いである。従って、英訳第3例における neck, eyes, ears も、身体部位そのものというよりは、水面の高さ、その人がはまっている借金の海の深さを表わしているのであろう。首ならまだしも、水が目あるいは耳の高さまで来ると、もう「溺死寸前」の状態と言えよう。

× ～に首を突っ込む

stick one's nose into～

「余計な干渉（介入）をする」際に突っ込むものは、日本語では「首」であるのに対して、英語では「鼻」である、という明確な違いが現れる例である。「彼は多くの事に首を突っ込みすぎる」は次のように数通りの英訳が可能だが、

- ・ He has too many irons in the fire.
- ・ He has his fingers in too many pies.

ここでも neck はお呼びでない。

△ ～を首を長くして待つ

wait impatiently for ～,  
look forward to ～ with impatience,  
wait for ～ with a craned **neck**

英訳の第3例は、「（鶴のように）首を伸ばして待つ」ということで、日本語の発想にそっくりだが、自然さという点では第1例、第2例にやや劣る、と判断して「△」とした。

× ～の首を切る、～を首にする

fire ～, give ～ the boot,  
give ～ the sack, etc.

× 首になる

be fired, get the boot,

get the sack, get the ax, etc.

日本語は「～を斬首刑に処す」→「従業員としての～を殺す」→「～の従業員生命（「選手生命」ならまだしも、こういう日本語は無いとは思いが）を絶つ」という流れで、「首（これに対応する英語は neck ではなくて、head であろう）を切る」という言い方をするが、英語の発想はかなり違うようである。唯一、「首になる」の英訳第 4 例 (get the ax) のみが「（断頭用の）斧（の一撃）を受ける」から、その後生首が転がる光景を想像させるが、これとてあくまで暗示しているに過ぎない。Neck（この場合はむしろ head か）という単語が顕現していない以上、「×」と判定せざるを得ない。

× a pain in the neck 不快な人(物)

「首の痛み」という日本語は、どうしても文字通りの意味にしか取れないであろう。

× bend one's neck to ~                      ~に屈服する

「首を（前方に）曲げる」と必然的に「頭を下げる」という「降参」のポーズになるという流れは分かりやすいが、「首を曲げる」という表現は自然な日本語とは言い難いので「×」とした。

× break the neck of ～      ～の最も骨の折れる部分をやり遂げる  
    ～の峠を越す

直訳「～の首を折る」は文字通りの意味にしか解釈されないであろう。

△ get (or catch, take) it  
in the neck

ひどく罰せられる、大打撃を受ける  
首になる、解雇される

「首になる」という意味の get it in the neck における it は、the ax 「断頭用の斧（の一撃）」を指すのであろう。（上の「首になる」の項の英訳第4例を参照されたい。） 「ひどく罰せられる、大打撃を受ける」という意味の場合の it は、a heavy blow （きつい一撃）くらいの意味だと思われる。 首を強打された時の状態を考えれば、これらの意味も納得がいく。

× put it down the neck 一杯ひっかける

これは実に面白い表現である。あえて「酒」と言わずに it (それ) とぼかした上で、「首 (正確には「食道」) を通して胃袋に流し込む」という言い方をしている。

× stick one's neck out 危険を冒す、自ら災いを招く

この表現のイメージは明確である。列車、車などの車窓から「首を突き出す」ことは危険この上ない、ということから出来たものであろう。

- × speak (or talk) through one's neck      戯言を言う、  
突飛なことを言う

「首を通して（首から）しゃべる」ことが何故「戯言を言う」という意味になるのかははっきりしない。そもそも、「首を通して（首から）しゃべる」という日本語自体が意味不明ではあるが。

### (3) 肩

- (人の) (双) 肩にかかる      rest (or fall) on (a person's) **shoulders**  
運命、将来などの重い「荷物」を担うのは肩である、という点では日英両言語が見事に一致している。次の例も同様。

- 肩の荷が下りる      feel a load off one's **shoulders**,  
feel one's burden lifted off  
one's **shoulders**, etc.

- × 肩の凝る (読み物)      solid (reading)

- × 肩の凝らない (読み物)      light (reading)

日本語の発想では、「居住まいを正して」読まなければならないような内容なので、「肩が凝る」というふうに、読み手に焦点を当てているのに対して、英語では読み物そのものを solid (「(固体のように) 中身がぎっしり詰まっている、内容が濃い」というニュアンスか) という形容詞で修飾しているようである。Light (reading) の方は、「本という入れ物に比して、中身が少ない」→「軽い」という流れからか。

- × ～の肩を持つ      take sides with～,  
stand (or take) up for～, etc.

この表現は何通りもの英訳が可能だが、shoulder を用いてはどうも無理なようである。次の例も同様。

- × ～と肩を並べる      rank with ～, rank beside ～,  
be on a par with ～,  
be even up with ～, etc.

- × cry on (a person's) shoulder      (人) に同情 (慰め) を求める

他人の肩にすがりついてオイオイ泣きながら悩みを打ち明けているシーンは容易に想像できるが。

- × give (a person) the cold (人) によそよそしい態度を取る
- shoulder (人) をすげなく拒絶する

「? 冷たい肩を与える」は意味不明。日本語に「肘鉄を食らわす」という表現がある（通例、男女間というコンテキストに限って使われるようである）が、これとて「肩」からは少々ずれる。

- × put (or set) one's shoulder 目的に向かって努力する
- to the wheel

この英語表現を見ると、ぬかるみにはまってスタックした幌馬車を動かそうと車輪に肩を当てて必死に押している……そんな光景がまざまざと眼前に浮かぶが、直訳「車輪に肩を当てる」を見て「目的に向かって努力する」という意味だな、と即座に理解するのは難しいであろう。

#### (4) 腕

- × 腕が鈍る lose (one's) touch
- × 腕が上がる acquire more skill,  
improve in ability
- × 腕を磨く improve (or polish, hone) one's skill,  
develop one's ability, etc.
- × 腕を試す try one's hand,  
make trial of one's skill, etc.
- × 腕によりをかける exert one's utmost skill
- × 腕が鳴る be itching (or burning)  
(=腕を試したくて to try one's hand  
うずうずしている)

日本語の感覚では、技能・技術などが「宿る」場所は腕、と相場が決まっている。言い換えると、「技能・技術＝腕」という公式が完全に出来上がっている。例えば、「技術を磨く」という表現も可能ではあるが、日本語としての自然さという点では「腕を磨く」の方に軍配が上がるのは間違いないであろう。日本語の「腕」という名詞が、「(体の一部としての) 腕」という原義で使われるのと、「(技能・技術の象徴としての) 腕」という転義で使われるのと、どちらが頻度が高いか、と問われたとしたら、正確なデータがある訳ではないが、筆者の直感では「後者の方が優勢」である。

一方、英語では「技術・技能」をあくまで抽象的な存在として捉えている。時に（例えば）真鍮製の像 (**polish** すべきもの) や剃刀 (**hone** すべきもの) などの具体的なモノに姿を変えることはあっても、人間の体の特定の部分に「宿る」ことはめったにない。仮に宿ったとしても、それは腕 (arm) ではなく手 (hand) である。（「腕を試す」の項参照）



- × charge (a person) an arm and a leg (人) に法外な金を請求する

何かをしてやった対価として、「腕一本と脚一本を寄越せ」というような理不尽な要求をする、ということから出来た表現だと思われるが、直訳は意味不明である。

- × at arm's length すぐ近くに  
よそよそしく

同じ表現が、「近い」と「(心理的に) 遠い」という相反する2つの意味に使われるというのは興味深い事実である。物が腕の長さ(通常60~80 cmか)の距離にあるのは「近い」が、相手が人間だと同じ距離でも「遠い」と感じる感覚は、握手・抱擁(hug)という「人と人との距離をゼロにする動作」が日常生活に定着している英語圏ならではであろう。少なくとも、日本人の感覚では、人と人との距離が60~80 cm あっても、別にそれを「よそよそしい」と感じることはあまりないのではないか。

- (a person's) right arm (文字通りの意味で) 右腕  
(比喩的な意味で) 右腕

左利きの人には申し訳ないが、最も頼りになるのは利き腕たる右腕である、という認識は両言語に共通しているようである。

- × be long in the arm 盗癖がある

これはイギリスの俗語であるが、なまじ「腕が長い」ために沢山の物に「手が届いて」しまって、ついつい失敬したくなる、という発想であろう。日本語で言うと、「手癖が悪い」に相当するであろうか。

金田一・池田(1980)、新村(1955)などには「手が長い」という慣用句が載っている。これを「(広義の) 手<sup>\*註1</sup>=肩から指先までの部分」と解釈すれば、英語の方とぴったり重なるから、「×」という判定は酷なような気もするが、筆者は寡聞にして「手が長い」という表現が実際に使われるのを聞いたことがない。それゆえ、「手が長い」は〈古語〉と判断して<sup>\*註2</sup>、あえて「×」とした。

因みに、「盗癖がある」に相当する英語の表現としては、上の be long in the arm の他に、be light-fingered, be kleptomaniac もある。

- × the long arm of coincidence 意外な巡り合わせ

これも面白い表現である。「偶然」は長い腕をもっているために、お互い遠く離れた人同士を引き合わせることがある、ということであろう。こういう発想は日本語には見られないものである。

## (5) 手

- × 手を打つ (1) take a countermeasure,  
(=対策を講ずる) take action, etc.
- × 手を打つ (2) strike a bargain,  
(=取引を成立させる) make a deal, etc.

(2) については、商談が成立した時に手を叩いて喜びを表現する習慣から来た表現だろうと容易に想像がつくが、(1) の由来ははっきりしない。(囲碁・将棋からか。)

- × (人の) 手に余る be beyond (a person's) control,  
be beyond (a person's) capacity, etc.

「大き過ぎる」→「手に持てない」→「制御しきれない」という流れからか。いずれにしても、英訳の方に手(hand) は登場しない。

- △ 手に負えない be unmanageable,  
be uncontrollable,  
be out of **hand**, etc.

英訳の第3例は、動きが激しすぎて(制御・支配の象徴としての) hand から飛び出してしまふ、という書き方であろう。

- × 仕事が手につかない cannot go about one's work,  
cannot settle to work, etc.

日本語の発想では、(例えば) 字を書く仕事をしている最中に、気懸りな事があつたりすると、筆(これが「仕事」の象徴)が手からぽろっと落ちてしまって仕事にならない、という光景が思い浮かぶが、一方、英語の方はというと、心配事などの distracter のせいで「落ち着いて仕事に取り組めない」というごく普通の表現になっている。

- × ～と手を切る sever one's connection with ～,  
make a break with ～, etc.

- △ ～と手を結ぶ ally with ～,  
join **hands** with ～, etc.

この2つの表現のコントラストは興味深い。「関係を結ぶ」ときには hand を用いた表現が可能なのに、「関係を絶つ」ときには hand の出番がない。日本語では、「(結んだ後に残る) 関係」も「手」と呼ぶのに対して、英語ではその関係を hand で表わすことはないようである。従って、sever (絶つ) の目的語は connection ということになるらしい。

× ～に手を焼く                  have difficulty (in) dealing with ～,  
find ～ difficult to handle, etc.

日本語の発想では、「厄介な人物」を（例えば）焼けた石に喩えて、「うかつに手を出すとやけどする物」と捉えているのであろうが、英語の方にはそれは見られない。

× be not much of a hand at ～      ～があまり得意でない

この hand は、「技術、能力（の持ち主）」という意味であろう。（前出「腕を試す」の項を参照）

○ bite the hand that feeds one 飼い主の手を噛む  
(→恩を仇で返す)

英語は、「犬の立場から」の表現だが、日本語では普通、「飼い犬に手を噛まれる→恩を仇で返される」と「飼い主の立場から」表現する、という違いはあるものの、この程度は許容範囲であろうと判断して「○」を付けた。

○ dirty (*or* soil) one's hands 手を汚す

日英両言語が見事なほどぴたりと一致している。泥（悪事・不名誉の象徴）に手を突っ込む、というイメージであろう。

× get one's hand in ~                      ~のコツを覚える

この hand は、これまでも数回登場している「熟練、腕前」という意味の hand であろう。

× give (a person) the glad hand      (人) にうわべだけの歓待をする

非常に面白い表現である。「（握手のために差し出した）手（だけ）が喜んでいる」と書くことによって、それ以外の部分（端的に言えば、心）は喜んでいない、ということを暗に示しているのであろう。

× win hands down 楽勝する

「両手を下していても」つまり「手を使わなくても」勝てる、というところから出来た表現であろう。

○ have one's hands free                      手が空いている

これは、日英両言語が全く一緒である。次例も同様。

○ have one's hands full                      手が塞がっている

○ heavy on (or in) hand 手に負えない、扱いにくい

「重くて手（制御・支配の象徴）に負担がかかる」→「コントロールしにくい」という発想であろう。前出「手に負えない」の項を参照されたい。

○ off (a person's) hands (人の) 手を離れて

和訳における「手」は「（責任・管理の象徴としての）手」であろう。次例に見られる hand も同様。

× take ~ in hand ~の責任（管理）を引き受ける

× play into (a person's) hands (知らず知らずのうちに/策略によって)  
(人の) 利益になるように行動する  
「（人の）思う壺にはまる」

この英語表現の由来は不明。

× put one's hand in one's pocket お金を寄付する

日曜日の教会での offering（献金）風景を思い浮かべると分かりやすい。礼拝の最中に帽子、箱などが回って来ると、献金の意志がある人はポケットに手を突っ込んで財布を取り出す。（その意志がない人は帽子をそのまま隣りの人に回す。）判定こそ「×」だが、この表現は日本人にも分かりやすいのではないか。通行人が「赤い羽根共同募金」の募金箱の前で足を止めてポケットに手を突っ込んだら、普通それは「いくばくかのお金を寄付しますよ」という意思表示と見なされるからである。

○ put (or set) one's hand to ~ ~に着手する、~を掴む

ここでは、両言語が気持ちいいくらいぴたり一致している。

× see (a person's) hand in ~ (人が) ~に一枚かんでいると分かる

実に面白い表現である。ここでの hand は日本語で言うと「（関係・関与の象徴としての）手」だと思われる。（例えば）企みなどが入っている黒い箱に誰その手が触った跡（指紋？）がついているのが見える、というイメージであろうか。

○ wash one's hands

(1) お手洗いに行く

(2) 手を切る、手を引く

2つの意味があるうちの両方ともに「手」が登場する、という（4段階評価であれば）「◎」を付けてやりたいくらいの珍しい例である。和訳 (1) はいわゆる婉曲語法で、「大小便をしに行く」といったあからさまな表現は避けたい、というのは日本人にも英米人にも共通して見られる心理のようである。(2) における「手」（及び英語の hand）は前項にも登場した「関係・関与の象徴」である。日本語にもう一つ、「足を洗う」という似た意味の表現があ

るが、こちらは専ら「悪事」を対象とするのに対して、wash one's hands (2) の対象は別に悪事とは限らない、という違いがある。

## 結 び

本稿のような研究を行なう上で、まず頭が痛いのは日英両言語における体の「分割」の仕方の違いであった。例えば、日本語の「頭」は通例、額から上の部分を指すのに対して、英語の head は（胴体と頭部をつなぐ部分としての）首から上の部分を指し、しばしば日本語の「首」\*註3に相当する、といったような違いである。

ただ、異なる言語間でのことであるから、これは致し方ないであろうが、日本語の内部においても、「referent のずれ」が生じる場合がある。例えば、日本語の「手」は広義では「肩から指先までの部分」ということで、「腕」を含むことになる。従って、「腕が上がる」とほぼ同じ意味で「手が上がる」\*註4という慣用句も存在する、といったような分類を試みる筆者のような研究者泣かせの事態がしばしば生じることになる。

紙幅の関係で、「胸」「腹」「足」までカバーできなかったことは残念である。次稿への持ち越しとしたい。ひとまず、「全身」をカバーし終わっても、更に「目」「耳」「口」というふうにとどんどん内容を膨らませていく余地はある。

また、これまた紙幅の制約上、全ての慣用句・イディオムを網羅できなかったことも心残りである。特に、名詞 hand を含む表現は数多くて、小西（1991）のような中辞典クラスでも百以上の記載があったために、由来が興味深い物だけをピックアップせざるを得なかったことも申し添えておく。

## NOTES

- \*1 「（狭義の）手」は、もちろん「手首から指先までの部分」である。
- \*2 例えば、松村（1988）のような比較的新しい国語辞典では、「手が長い」という慣用句の記載はない。
- \*3 例えば、「さらし首」、「生首」などの表現における「首」がこれである。
- \*4 「ほぼ同じ」と言ったのは、後者の使用できる場面が限定されているからである。  
「手が上がる」は、少なくとも現在は普通「書道の腕前が上がる＝字がうまくなる」といった意味で使われる。

## BIBLIOGRAPHY

- 金田一春彦・池田弥三郎（編）（1980）「国語大辞典」学習研究社  
 小西 友七（編）（1991）「ジーニアス英和辞典」大修館書店

増田 綱（編）（1974）「新和英大辞典」研究社

松村 明（編）（1988）「大辞林」三省堂

新村 出（編）（1955）「広辞苑」岩波書店

山岸 勝榮・郡司 利男（編）（1991）「ニュー・アンカー和英辞典」学習研究社